



Johnson Matthey の歴史概略

始まり

1817年 Percival Norton Johnson は、ロンドンのハットンガーデンにて、金の分析者として仕事を始めました。彼はその正確さから即座に評判を得、また、自分の分析した金の延べ棒の購入を申し出て、その正確さを裏付けました。間もなく小さな金精製所が設立され、これは後に、プラチナ及びパラジウムも扱うまでに拡張されました。1851年には、George Matthey が加わりパートナーシップを組み、Johnson & Matthey を設立します。彼らの技術と完璧性の結果として、彼らは 1852 年には英国銀行の公式分析者として、その数年後にも、公式溶解及び精製技術者として任命されました。

1817年から2004年までの、主な開発の歴史の詳細は、[ここをクリックして下さい](#)。

プラチナの早期開発

1860年に Percival Norton Johnson は退職し、1891年に Johnson Matthey & Company が設立されます。プラチナ製造は継続的に進展し、プラチナ溶解のための実用的方法が生み出され、これは 20 世紀に及ぶまで頻用されました。George Matthey は又、安定性のある接合部を作るための、プラチナの融接を開発しました。これらの進歩的開発の結果、Johnson Matthey は、製造及び、硫酸の濃縮に使用されるプラチナ・ボイラー製造のスペシャリストとなります。これらの早期開発は、プラチナの工業用使用の基盤となり、今日当社における第一の関心事であります。

1923年には、南アフリカのトランスバルにあるルステンブルク及びリンデンブルク地区にて、プラチナの広大な鉱床が発見されました。Johnson Matthey 及び冶金家達は、それらの原鉱よりプラチナの集合金属の抽出方法を開発し、その結果、1931年に、鉱床を扱う会社が設立されました。精錬及び電解精製所が、プラチナ・金属の抽出のためにプリムスタウンに建設され、抽出物は最終精製のためにハットンガーデンに送られました。

国際的な成長

第二次大戦後、会社は多大な成長を遂げます。それ以前には、会社はアメリカ、カナダに支社を設立していましたが、その後子会社や代理店のネットワークが世界中に張り巡らされるようになります。会社のプラチナ精製作業の全最終工程を統一するため、建設費百万ポンドの新精製所が 1957 年ロイストンに建設されました。

1963年には Blythe Colours Works Limited が子会社となり、顔料と窯業製品の製造及びマーケティングにおいてグループの活動が非常に活発となります。これらの製品の幅は徐々に拡大し、陶器の染色、白及びエナメル光沢、陶器及びタイルのボディ着色とスリップ着色、そして金属とガラスのエナメルも含むようになります。

1965年から67年に Johnson Matthey グループの再編成が行なわれ、それぞれ特殊製造や経理活動を請け負う新しい数社の会社が英国に設立されました。これらは、Johnson Matthey Chemicals Limited, Johnson Matthey Metals Limited, Johnson Matthey Printed Products Limited, Blythe Colours

Limited 及び Johnson Matthey Bankers Limited 等です。1974 年には、多くの本社機能は経営会社に移譲され、新しい経営本部がサウスゲートに設立され、ハットンガーデンにあった古い本社は、再開発のため残されました。

車の排気ガスからの公害をコントロールするための、自己触媒の研究は、1974 年ロイストンにおける世界初の自己触媒の製造工場のオープニングへと繋がり、その後アメリカ、オーストラリア、ブリュッセルにもより大規模な工場が建設されました。

この時期、グループは多くの賞の獲得に成功します— LP OXO ヒドロホルミル化工程での仕事に対する Kirkpatrick 化学工学業績賞、輸出及び環境業績に対する女王賞、及び自己触媒に関する研究に対しての技術の女王賞を受賞しました。

試練の時

1983 年から 1985 年の間、グループは多大な経営困難を経験することになります。アメリカでの宝石経営での損失、Johnson Matthey Bankers の深刻な問題と続き、これは 1984 年秋に英国銀行に売却されることになります。新会長と任命された Neil Clark、及び最高責任者 Eugene Anderson は、変化の目まぐるしい時代の到来を告げるようになります。

増大する経理管理の期間中、サウスゲートは閉鎖となり、機能は経営会社に移行され、ハットンガーデンでの小規模なグループ本部に戻されます。1987 年には全グループのトータル・クオリティ政策が施行され、全ての従業員を含んだ、プロフェッショナルな基準の向上、グループの全世界での経営の効率性と収益性の向上を目標としました。

アメリカでの電子工学素材に関する企業買収、及びドイツでの化学カタログ販売に続き、重役会の再構成及び、会社の経費構成に対する広範囲な見直しが、1989 年と 1990 年に行われました。

後の 1994 年に会長兼最高責任者となる David Davies を会長とする新しい経営陣が就任しました。1991 年 2 月には、グループ本部はハットンガーデンからトラファルガー広場のコックスパー通りに移りました。

PGM の精製及び化学製品部門の再構成という厳しい時期があった一方で、自己触媒の施設は進み、南アフリカ、メキシコ、マレーシア、アルゼンチン、そしてインドと新施設が設立されました。電子工学業界の製品に対する急速な投資、及び Cookson 社との染色と陶器素材部門におけるジョイントベンチャーは、グループ全体にとり 1990 年がいかに活動的であったかを象徴しています。

未来志向

2000 年までには Cookson 社から、Cookson Matthey Ceramics JV を購入し、電子工学素材部門を Allied Signal 社に売却したことは、JM の触媒、貴金属及び特殊化学の核心的技術に対する、新しいフォーカスを意味しています。

1998 年に最高責任者となった Chris Clark の指導の下、触媒、そして薬品業界における製品及びサービス、両面でのグループの地位を強化させた多くの重要な政策買収が行われました。2001 年には Pharm-Eco Laboratories を買収、2002 年には、ICI の Syntex 部門、そして Cascade Biochem and Avocado Research Limited の買収が続きました。このフォーカスを反映するため、グループは 4 つのグローバル部門、即ち、触媒、貴金属、染色とコーティング、及び薬品素材へと再構成されました。

2004 年 7 月に Neil Carson は、最高責任者となり、Johnson Matthey はグループの政策開発における重要なステップを踏み続けました。新施設及び製造過程における設備投資は、会社にとり、多くの重要な製品分野での

急速な成長の可能性を引き出すことを可能にしています。燃料電池のような新しい技術と相まって、これは 21 世紀に多くのことを約束してくれます。

今日 Johnson Matthey Plc は、貴金属及び他の素材に付加価値を付けるための特殊技術を使用して、高度な素材技術を専門としています。Johnson Matthey は、その現存する事業の開発、新事業の育成、及び株主、従業員、そして会社のために利益となる買収により、R & D 及び新技術に投資することにより、成長を探索しています。